

# 幼稚園教育要領における教育内容の変遷

—領域「健康」を中心に—

清 水 洋 生

Changes in educational content in course of study for  
Kindergarten:  
Focusing on content analysis of child care and education  
“health”

Hiroo SHIMIZU

*Niijima Gakuen Junior College  
Takasaki, Gunma 370-0068, Japan*

## 要 旨

本研究は、幼稚園教育要領における教育内容の歴史的変遷を領域「健康」を中心に検討し、その教育的意義や特性を明らかにすることを目的として行われた。昭和23年保育要領から平成20年幼稚園教育要領の各改訂における歴史的変遷、改訂の概要、改訂の要点を幼稚園教育要領、中央教育審議会答申、文部科学省報告書、先行研究などから分析し、改訂毎に詳説した。さらに、幼稚園教育要領における領域「健康」の教育内容の歴史的変遷について、行政指針や報告書を手掛かりに教育的意義を含め考察することで、その特質を明らかにした。

## Abstract

The present study examined the historical transition of educational contents in course of study for Kindergarten focusing on the field “health” and clarifying its educational significance and characteristics. Historical transformation, overview and points of the course of study for Kindergarten from 1948 to 2008 were analyzed from the course of study for Kindergarten, the report of the Central Council for Education, the report of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the preceding studies and others. Furthermore, the author examined the educational significance from the administrative guidelines and reports on the historical transition of the area “health” in the course of study for Kindergarten and clarified the characteristics.

## 1 はじめに

少子高齢化, グローバル化, 核家族化, 高度情報化—子どもたちを取り巻く状況は, 急激な変化を遂げ, 彼らの未来を支える教育の在り方も新たな局面を迎えている。その中で, 刻々と変化する社会に対応し, 子どもたちのよりよい成長に寄与すべく, 平成30年度次期学習指導要領改訂が実施される。現在は, 平成29年3月31日に幼稚園教育要領を改正する告示が文部科学大臣によって公示された。

中央教育審議会教育課程部会において, 「幼稚園教育要領の改訂にあたっての具体的な検討の視点」として文部科学省(2016)は, ねらい及び内容について「資質・能力による見直しや現代的な諸課題を踏まえた『健康』(中略)の内容等を示すこと」が必要だとしている。なるほど, 子どもの発達特性を踏まえつつ, どのように教育内容等の充実を図るのが現場からも望まれているのだろう。

領域「健康」についての研究は, 音楽教育と領域健康との関連(山浦, 1985), 保育内容(健康)の授業構成(松本, 2012), 領域健康における人間性の考察(村田, 2000)などがある。先行研究の一部には, 幼稚園教育要領の領域「健康」における教育内容の記述がみられる。しかし, それらのほとんどが歴史的変遷を明らかにし, 大網的知見に基づく考察であるとは言えない。

そこで本研究は, まず昭和23年保育要領から平成20年幼稚園教育要領の変遷を明らかにする。さらに, 幼稚園教育要領における領域「健康」の教育内容の歴史的変遷について分析し, 教育的意義を含め考察する。

## 2 幼稚園教育要領の変遷～戦後から現行まで～

我が国における最初の幼稚園・保育所・家庭における幼児教育の手引である「保育要領」から幼稚園の教育課程の基準である「幼稚園教育要領」の変遷について述べていく。

### ①昭和23年(1948)「保育要領—幼児教育の手引き—」の概要

昭和23年文部省から刊行された「保育要領」は, 国として作成した最初の幼稚園・保育所・家庭における幼児教育の手引である。保育要領は, 昭和22年の学校教育法によって学習指導要領に並ぶ位置づけがなされ, 幼稚園教育要領の前身として, 幼稚園教育における保育内容の基準となった。ここでは主に, 幼児期の発達の特質, 生活指導, 生活環境等について解説されており, 保育内容を「楽しい幼児の経験」として, 12項目に分けて示している<sup>1</sup>。さらには, 幼稚園と家庭との連携の在り方についての

<sup>1</sup> 「六 幼児の保育内容—楽しい幼児の経験—」の中で, 1 見学, 2 リズム, 3 休息, 4 自由遊び, 5 音楽, 6 お話, 7 絵画, 8 製作, 9 自然観察, 10 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居, 11 健康保育, 12 年中行事の12項目に分類されている。

解説もなされた。

なお、昭和22年の「学校教育法」,「児童福祉法」制定,翌年の「保育要領」刊行と,この頃は,戦後我が国の幼児教育,保育制度,保育内容の基礎が形成された時期である。余公(2011)は,戦後から平成20年「幼稚園教育要領」告示,「保育所保育指針」告示を経て現在までを6つの時期区分を行い,それぞれ保育制度・保育内容に関して命名した。戦後から保育指針が厚生省から刊行される前年の昭和26年までを「保育制度・保育内容の大綱化の時期」としている。

#### ②昭和31年(1956)「幼稚園教育要領」の概要

昭和31年文部省から刊行された「幼稚園教育要領」は,教育課程の基準としてさらなる大綱化を図る等の観点から,「保育要領」の全面改訂が行われた。とりわけ,幼稚園の教育課程の基準としての性格を踏まえた改善がなされ,学校教育法に掲げる目的・目標に従って,教育内容を「望ましい経験」として示した。この「望ましい経験」として教育内容が初めて6つの「領域」という用語を用いて分類整理された。6領域とは,「健康」,「社会」,「自然」,「言語」,「音楽リズム」,「絵画製作」である。各領域に示す内容を総合的に経験させることとして,小学校以上における教科との違いを明示。保育内容を領域によって系統的に示すことにより,小学校との一貫性を持たせた。さらに,改訂の要点として,幼稚園教育における指導上の留意点が明示されることになった。

なお,昭和23年の「保育要領」は,幼稚園だけでなく,保育所や家庭における保育の手引書を目指した試案として刊行されたが,昭和31年の「幼稚園教育要領」は,専ら幼稚園の教育課程のための基準を示すものであった。

#### ③昭和39年(1964)「幼稚園教育要領」改訂の概要

昭和39年幼稚園教育要領では,幼稚園教育の独自性について一層明確化し,教育課程の構成についての基本的な考え方を明示するなどの観点から全面改訂が行われた。

改訂に際し学校教育法施行規則76条が改正され,それ以降の幼稚園教育要領は,小学校・中学校・高等学校と同様に,文部省告示として公示された。それにより,教育課程の基準としての性格が明確化された。教育内容を見ると,昭和31年幼稚園教育要領同様に6領域であったが,効果的な指導を行うための,さらには調和のとれた発展的,組織的な指導計画を作成するための留意事項である「指導および指導計画作成上の留意事項」が同要領第3章に示された(文部省,1964)。

#### ④平成元年(1989)「幼稚園教育要領」改訂の概要

平成元年幼稚園教育要領改訂のポイントについて,文部科学省(2005)は,「(1)幼稚園教育の基本を明確に示すことにより,幼稚園教育に対する共通理解が得られるようにすること,(2)社会変化に適切に対応できるように重視すべき事項を明らかにし

て、それが幼稚園教育の全体を通して十分に達成できるようにすること、という2つの観点から全面改訂を行った」としている。

さらに、平成元年幼稚園教育要領第1章総則にて、文部省（1989）は、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」とし、左記を「幼稚園教育の基本」とした。幼児期の発達観、あるいは、幼児期の特性の把握の重要性が示されていると言えるだろう。

教育内容を見ると、昭和39年幼稚園教育要領では6領域であったが、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の「5領域」に改められた<sup>2</sup>。さらに、平成元年幼稚園教育要領は、6領域を5領域に変えると同時に、各領域の項目を達成目標である「ねらい」と指導事項である「内容」とに分け、「ねらい」15項目、「内容」47項目、計62項目にした。この改訂について宍戸（1989）は、「旧『要領』において137項目であった『望ましいねらい』が、『ねらい』と『内容』とに区別され、整理されたといってい

であろう」と考察している。

上記「5領域」は、平成元年改訂後、現在まで継続されている。6領域から5領域採用に至る変遷、あるいは6領域批判については、文部省が平成元年改訂に先立って開催した「幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議」による「幼稚園教育の在り方について」という報告書で見ることができる。

現行の幼稚園教育要領においては、教師が幼児のうちに育つものをとらえる際の視点を提供する観点から、「ねらい」を、（中略）六つの「領域」に分類して示しているが、「領域」が単に小学校の教科をより簡易にしたものととらえるなど、その意図は必ずしも幼稚園の実際の指導の場で十分に理解されていない。このような状況を踏まえ、現行の幼稚園教育要領において各領域に分類して示されているような視点が、教師にとっては必要なものであると同時に、幼児に直ちに分割的、体系的に課すべき指導内容ではないことがわかるよう、「領域」という名称を変更することも含め、その示し方を再検討すべきである。（文部省, 1986）

上記の様に6領域を批判し、その後5領域に変更したわけだが、この変更の際し、文部省は「なぜ6つの領域を変更して『5つ』の領域にしたのか」について明言はしてい

---

<sup>2</sup> 「音楽リズム」と「絵画製作」を統一して領域「表現」とし、「社会」が人とのかかわりに関する領域「人間関係」に変わった。身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」については、「社会」と「自然」の内容を構成したと考えることができるだろう。

ない。しかし、文部省（1986）が、「幼稚園教育の在り方について<sup>3</sup>」で示した「①幼稚園教育の基本的な概念が余り明らかにされておらず、教師の創意・工夫のもととなる共通理解が得られにくい。②多様なねらいが網羅的に羅列されており、全体を構造的に理解しにくい。」という昭和39年幼稚園教育要領の問題点の改善を図るための手立てであり、さらに、領域の名称や内容が小学校の教科内容と混同されやすく、領域を小学校における教科と同様に扱ったり、幼稚園教育にふさわしくない実践が行われているという反省からであったと推察されよう。

さらに、この領域改訂は平成元年小学校学習指導要領改訂にも影響を与えたと推察される。つまり、「社会」と「理科」を廃して、両教科を統合した「生活科」の設置である。幼児の生活全体を通じて総合的な指導を行う視点が考慮され、領域「環境」が新設されたのであろう。

#### ⑤平成10年（1998）「幼稚園教育要領」改訂の概要

平成10年幼稚園教育要領改訂では、完全学校週5日制の下、ゆとりある教育活動を展開し、幼児に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの生きる力の基礎を育成することを基本的なねらいとして行われた（文部省, 1999）。具体的には、教師が計画的に環境を構成すべきことや活動の場面に応じて様々な役割をはたすことが明示され、指導計画作成上の留意事項には、小学校との連携が示された。さらには、子育て支援のために地域に施設を開放したり、幼児教育に関する相談に応じるなど、幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めることが加えられた。前述したが、教育内容は、5領域のままである。

#### ⑥平成20年（2008）「幼稚園教育要領」改訂の概要

平成18年に教育基本法改正、平成19年に学校教育法改正が行われ、中央教育審議会においてこれらを踏まえた審議が行われた。2年10か月にわたる審議の末、平成20年1月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申がなされた。この答申を踏まえ、平成20年幼稚園教育要領改訂が公示された（文部科学省, 2008a）。

重要事項として、幼小連携の推進、さらには幼小の円滑な接続を図るため、規範意識や思考力の芽生えなどに関する指導を充実させることが示された。また、子どもの

---

<sup>3</sup> 昭和58年中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告を経て、昭和59年「幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議」が設置された。幼児及び幼児を取り巻く環境等の変化に対応した幼稚園教育の内容・方法の改善を検討すべく、全国的な実態調査が行われた。その調査結果として取りまとめられたのが、「幼稚園教育の在り方について」である。ここでの内容が、平成元年幼稚園教育要領改訂の原点となっている。



育ちの変化や社会状況を鑑み、「発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭の連続性」を重視し、預かり保育や子育て支援を推進することを明示した。

教育内容については、5領域のままであったが、「環境」、「言葉」では、考える姿勢をより一層重視した内容になり、「表現」では、表現のプロセスを大切にすることが付け加えられた。「人間関係」の領域は最も追加が多く、主として「協同性を伸ばすこと」、「規範意識の涵養」、「自分に自信をもって行動させるように導くこと」、「子どもが安心して園で過ごすために、家族の愛情を感じ取れること」が改訂ポイントであった（無藤,2008）。領域「健康」については、下記にて詳説する。

### 3 領域「健康」における教育内容の変遷

領域「健康」の教育内容の歴史的変遷について考察する。昭和31年幼稚園教育要領にて、教育内容が「望ましい経験」として6つの「領域」という用語で分類整理されたことは前述の通りである。その6領域のひとつとして、「健康」は初めて示された。ここでは、教育内容における「望ましい経験」として以下の5項目が挙げられている。5項目とはつまり、1.健康生活のためのよい習慣をつける、2.いろいろな運動や遊びをする、3.伝染病その他の病気にかからないようにする、4.設備や用具をたいせつに扱い、じょうずに使う、5.けがをしないようにする、である。次に、昭和39年幼稚園教育要領における教育内容については、1.健康な生活に必要な習慣や態度を身につける、2.いろいろな運動に興味をもち、進んで行なうようになる、3.安全な生活に必要な習慣や態度を身につける、という3項目が示された。平成元年幼稚園教育要領では、6領域が5領域に改訂されたが、「健康」の名称はそのまま踏襲された。平成元年以降の幼稚園教育要領における教育内容の変遷について表1にて比較検討する。

表1 領域「健康」における教育内容の変遷～平成元年から平成20年まで～

平成元年	平成10年	平成20年
この領域は、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う観点から示したものである。	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
1. ねらい	1. ねらい	1. ねらい
(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。	(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。	(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。
2. 内容	2. 内容	2. 内容
(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。	(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。	(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。

幼稚園教育要領における教育内容の変遷 ―領域「健康」を中心に―

<p>(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。</p> <p>(3) 進んで戸外で遊ぶ。</p> <p>(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。</p> <p>(5) 健康な生活のリズムを身に付ける。</p> <p>(6) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。</p> <p>(7) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える。</p> <p>(8) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。</p> <p>(9) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。</p>	<p>(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。</p> <p>(3) 進んで戸外で遊ぶ。</p> <p>(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。</p> <p>(5) 健康な生活のリズムを身に付ける。</p> <p>(6) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。</p> <p>(7) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える。</p> <p>(8) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。</p> <p>(9) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。</p>	<p>(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。</p> <p>(3) 進んで戸外で遊ぶ。</p> <p>(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。</p> <p>(5) 先生や友達と食べることを楽しむ。</p> <p>(6) 健康な生活のリズムを身に付ける。</p> <p>(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。</p> <p>(8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。</p> <p>(9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。</p> <p>(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。</p>
3. 留意事項	3. 内容の取扱い	3. 内容の取扱い
<p>(1) 心と体の健康は相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、心と体の健全な発達を促すこと。</p> <p>(2) 生活の中で興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組むことにより、体を動かすことの楽しさを味わい自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、幼児の生活と遊離した特定の運動に偏った指導を行うことのないようにすること。</p>	<p>(1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。</p> <p>(2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。</p> <p>(3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。</p> <p>(4) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児とかかわりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付けるようにすること。</p>	<p>(1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。</p> <p>(2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。</p> <p>(3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。</p> <p>(4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。</p> <p>(5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児とかかわりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付けるようにすること。</p>

Note：平成 20 年にある下線は改訂のポイントであり、筆者が示した。

### ①領域目標の変遷

領域「健康」を説明する領域目標の変遷についてみていく。平成元年の領域目標は、「この領域は、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う観点から示したものである」（文部省,1989）とある。続いて平成10年、平成20年の領域目標は同様に、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」（文部科学省,1998,2008b）となっている。領域目標だけを比較分析すると、平成元年の「観点から示したものである」という記述が平成10年以降削除されただけで、領域目標は平成元年から踏襲されてきたと言える。これは、生涯を通じて心身共に健康で安全な生活を営むことができるように、その基礎を幼児期から涵養するという一貫した領域目標に従って幼稚園教育が行われてきたということであろう。

### ②ねらいの変遷

表1からわかるように、「ねらい」の文言は、句読点以外、平成元年から平成20年まで踏襲されている。これは、「幼児は自己を十分に発揮して伸び伸びと体を動かし、充実感や満足感を味わいながら、身体諸機能の調和的な発達を促す」という「ねらい」が一貫されていることに他ならない。さらに、幼稚園生活の中で、自分自身の体を大切に、安全で清潔な環境に親しむことで望ましい生活習慣や態度を培っていくことの重要性も一貫されている。

目まぐるしく変化する社会の中で、これほどまでに「ねらい」が踏襲される所以は、「明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」というねらいを筆頭に、領域「健康」はあらゆる領域を包括する「保育の原点」といっても良い重要な要素を多分に含むと言っても過言ではない（夏目,2002）。

### ③内容の変遷

表1より平成10年の内容は、平成元年を踏襲していることがわかる。そのため、ここでは平成20年の内容について検討する。

平成20年の内容の項目数を見ると、平成10年の9項目から1項目追加され10項目になっている。「(5) 先生や友達と食べることを楽しむ。」が追加されたが、内容全体を含めて考察すると、この頃課題とされていた視点が反映された改訂であったと言える。課題とはつまり、「子どもの体力・運動能力の低下」、「食育の推進」、「生活習慣の指導」である。この3点は「内容及び取り扱い」でさらにその視点が詳説されている。追加された視点については、下記「④留意事項・内容の取り扱いの変遷」に示す。

### ④留意事項・内容の取り扱いの変遷

まず、平成元年で「留意事項」であった項目名が平成10年以降では、「内容の取り扱い」になっている。これは、各領域の「留意事項」について、その内容の重要性を踏まえ、その名称を「内容の取り扱い」に改めたものである。



項目数をみると、平成元年2項目、平成10年4項目、平成20年5項目となっている。平成10年では、自然の中で伸び伸びと体を動かして遊び、興味や関心が戸外も向くように配慮すること、さらに、その際の動線について工夫することが新たに示された。また、これまで第3章指導計画作成上の留意事項に示されていた「基本的な生活習慣の形成」に関する記述が内容の取り扱いに移項された（文部省, 1999）。

平成20年のポイントは、表1の平成20年「3 内容の取り扱い」に記した下線部である。これは、この頃課題とされていた「子どもの体力・運動能力の低下」、「食育の推進」、「生活習慣の指導」が反映されたと言える。それぞれ追加された視点について検討する。

まず、「子どもの体力・運動能力の低下」については、(1)で「体を動かす気持ちよさを体験」という表現で述べられている。この視点が追加されたのは、文部科学省が行う「体力・運動能力調査」では数値は下げ止まりの傾向であったものの、幼児の運動能力は20余年前から低下の一途を辿っており、遊びの中で全身を十分に動かす経験がさらに重要視されたことが所以であると言えるだろう（杉原ら, 2004）。また、幼児期は、身体機能が著しく発達する時期である。この時期に、幼児が体を動かす楽しさを十分に味わい、安全に配慮しながら行わる「遊びを中心とした保育」の重要性が強調されたとも言えるだろう。

次に、「食育の推進」について、(4)で「和やかな雰囲気」、「様々な食べ物への興味関心」、「進んで食べようとする気持ち」という表現で述べられている。この視点が追加されたのは、平成17年に食育基本法が成立、平成18年に食育推進基本計画が策定され、厚生労働省が発表した食育プログラムにより、小学校や保育所で食育の取り組みが進められていたことが背景にある。さらに、厚生労働省が実施した「平成17年度乳幼児栄養調査<sup>4</sup>」をみると、「子どもが健康的な食習慣を身につけていくために、家庭とともに取組が必要な機関はどこか」という問いに、「保育所・幼稚園」が85.8%と最も多かった。保護者の幼稚園・保育所における食育への期待の高まりも改訂の一因であると推察される。

最後に、「生活習慣の指導」については、(5)で「家庭での生活経験に配慮」という視点が追加された。基本的な生活習慣は、元来家庭で行われるべき指導の範疇であることは言うまでもない。しかし、家庭の子育て力の低下とそれに伴い、3歳でおむつ

---

<sup>4</sup> 平成17年9月、4歳未満の子どもを対象に、全国の乳幼児の栄養方法及び食事の状況等の実態を調査し、母乳育児の推進、乳幼児の食生活の改善のための基礎資料を得ることを目的に実施された。調査客体は、2,722人（2,305世帯）。調査員が被調査世帯を訪問し、子どもの母親（もしくは、子どもに食事提供を行っている養育者）に調査票の記入を依頼し、後日調査員が回収する方式により実施された。

をしているなど生活に必要な生活習慣が身についていない子が珍しくない状況に鑑み、これまで以上に、幼児一人ひとりの生活習慣の獲得レベル合わせたきめ細やかな工夫が必要になったということであろう。

## 5 まとめ

本研究の目的は、幼稚園教育要領における教育内容の歴史的変遷を領域「健康」を中心に検討し、その教育的意義や特性を明らかにすることであった。昭和23年文部省から刊行された保育要領から平成20年幼稚園教育要領の内容分析から明らかになったのは、各改訂に至る変遷は全て、子どもたちを取り巻く社会の状況や現場の声から鑑みたアクチュアルな問題に対処すべく進められてきたということである。

平成30年度次期学習指導要領改訂が実施される。最大の改訂ポイントは、資質・能力の3つ「個別の知識や技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の柱で幼児教育の中核を取り出すことと、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を10個に整理して示すことである（無藤, 2016）。また、「ねらい及び内容」についても、資質・能力による見直しや現代的な諸課題を踏まえた「健康」の内容等を示すこととされている。加えて、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングの視点に基づく、学習指導の改善・充実など新たな視点が強調されている。幼稚園教育要領改訂において重要なのは、子どもたちと対峙する保育者・教育者が、行政指針である幼稚園教育要領を的確に理解し、子ども一人ひとりの最善の利益が考慮されたカリキュラムを構築し、提供することに他ならない。今後の課題としては、次期学習指導要領改訂で示された新たな視点を的確に捉えた実践を考察していくことである。

## 引用・参考文献

- 厚生労働省（2005）平成17年度乳幼児栄養調査, 平成18年6月29日厚生労働省発表, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-1.html>.
- 宍戸健夫（1989）新幼稚園教育要領における五領域と知的認識の能力について 保育研究所（編）どうみる新幼稚園教育要領 草土文化,第3章 47.
- 杉原隆・森司朗・吉田伊津美（2004）幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に關与する環境要因の構造的分析, 平成14～平成15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書.
- 夏目恒雄（2002）保育内容に關する一考察（1）-領域健康を中心として- 名古屋柳城短期大学研究紀要, 24, 13-26.
- 松本香奈（2012）食育の実践力を高める「保育内容（健康）」の授業構成 初等教育学研究報告, 1, 35-40.
- 無藤隆（2008）特集 幼稚園教育要領改訂のポイント ここからの幼児教育を考える, 2-7.
- 無藤隆（2016）幼稚園教育要領の改訂の構成イメージとは おしえて！無藤先生！月刊保育とカリキュラム, 9, 62-63.
- 村田務（2000）保育内容(健康領域)における「豊かな人間性」 白梅学園短期大学紀要, 36, 27-34.
- 文部省（1956）幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 文部省（1964）幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 文部省（1986）幼稚園教育の在り方について-昭和61年9月3日 幼稚園教育要領に關する調査研究協力者会議-月刊ニュー・ポリシー, 6, 221-227.
- 文部省（1989）小学校学習指導要領・幼稚園教育要領 東洋館出版.
- 文部省（1998）幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 文部省（1999）幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 文部科学省（2005）教育課程部会 幼稚園教育専門部会（第1回）配付資料 幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要, 資料8.
- 文部科学省（2008a）幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 文部科学省（2008b）幼稚園教育要領 フレーベル館.
- 文部科学省（2016）教育課程部会 幼児教育部会（第8回）配付資料 幼稚園教育要領の改訂にあたっての具体的な検討の視点, 資料2.
- 山浦菊子（1985）幼児の音楽教育における「動きのリズム」一考察-領域健康との関連から 聖和大学論集, 13, 79-95.
- 余公敏子（2011）保育所保育指針の変遷と保育課程に關する考察 飛梅論集, 11, 41-57.